

【実践報告】

「教職実践演習（幼）」の報告

広島文教大学教育学部教育学科

教授 田 中 崇 教

はじめに

本稿は、2023（令和5）年度「教職実践演習（幼・小）（以下、本科目）」の指導内容を整理すると同時に省察することによって、授業（教授）改善をめざすねらいがあり、これらを報告するものである。

本科目は、教育学部初等教育専攻幼児教育コースの4年次生（2023年度：45名）を対象に、教員養成・保育士養成課程の履修全体を通じて「教員として必要な資質能力の確実な確認」（文部科学省中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」2006）を目的とした。付記すれば2023（令和5）年度も幼児教育コース全在籍者である。本科目で設定した資質能力は、この中央教育審議会（2006）に準え、「使命感・責任感・教育的愛情」、「社会性や対人関係能力」「幼児・保護者理解ならびに学級経営」、「保育指導力」とした。毎年度、本科目主担当教員（筆者）は「学生の確かな成長を実現するための効率的効果的な指導」に基づく授業内容の構成について、前年度までの省察及び当該年度受講生の状況を踏まえながら関係教員等（主として幼児教育コース所属教員）と協議を重ねてきた。

2022（令和4）年度において示した改善点は、本科目の履修条件にあたる実習諸科目との連携ないし本科目に連なる系統的指導体制の確立であった。詳細は後述するが、実習諸科目での学びの利活用を今年度は15回の授業のテーマとした。

I 授業計画と実施

15回の授業計画は次のように構成し、すべて予定通りに実施した。

- | | |
|-----|---|
| 第1回 | オリエンテーションとこれまでの学びの振り返り、学修計画をたてる
授業日程・内容、教職履修カルテを確認するとともに、学修の見通しをもつ。 |
| 第2回 | 実習を総括的に振り返る—今後の取組に関する演習
教育実習ならびに保育実習を総括的に振り返り、専門職保育者として成長・向上していくための自己の特徴と課題を確認する。 |
| 第3回 | 幼児教育・保育学研究に関する最新の知見を理解する
研究会（広島文教大学教育学会）に参加し、幼児教育・保育に関する理論研究・実践研究に関する知見を得ると同時に、理論研究者や実践者（幼稚園教諭、保育士、子育て支援者等）との交流を深める。
こうした活動を通して、幼児教育・保育の視点から現代社会にある問題に関心を向ける。 |
| 第4回 | 指導計画案に基づく保育実践を深める①—個人での振り返り
ICT機器を積極的に活動しながら、保育実習や教育実習で作成・実践した計画案（指導案）を事例に、保育者（学生）の行為に潜んでいた意図や思いを改めて整理する。 |
| 第5回 | 指導計画案に基づく保育実践を深める②—グループでの振り返り・討議
ICT機器を積極的に活動しながら、各自で整理した保育者としての行為や意図・思いについてグループで発表しあい、よりよい保育の在り方について検討する。 |

- 第6回 指導計画に基づく保育実践を深める③—全体討議とその後のグループでの再度の振り返り・討議
ICT機器を積極的に活用しながら、グループで話し合ったことを全体会で発表し、他のグループや参加教員から質問・助言を受ける（全体討議）。その後、再びグループで「受けた質問や助言」について話し合い、深める。また、全体討議の運営及び必要な機材準備などの役割を担う。
- 第7回 子育て支援（保護者支援）に関するフィールドワークを行う
地域子育て支援の実践現場（すずらんひろば高陽）に赴き、保育実践を行いながら、子育て支援に関する実践的知見を深める。
- 第8回 子育て支援（保育の対象理解としての保護者）の理解を深める
子育て中の母親を招へいし、妊娠出産から育児に至るまでの親としての思いなどを理解するとともに、親（非支援者）の側に寄り添った支援について検討する。
- 第9回 広島県における乳幼児期の教育（子育て支援）施策を理解する—保育・幼児教育の行政理解
広島県教育委員会事務局乳幼児教育支援センターから指導助言者を招へいし、広島県の取組『『遊び学び育つひろしまっ子！』推進プラン』のねらいについて理解するとともに、実際の保育・幼児教育現場での事例に基づいた演習（ロールプレイを含む）を行い、保育・幼児教育についての理解を更に深める。
- 第10回 特別な支援を要する乳幼児（保護者）の支援を理解する
広島県教育委員会事務局乳幼児教育支援センターから指導助言者を招へいし、基本事項を確認するとともに、事例について討議・検討する（ロールプレイを含む）ことによって、専門職保育者としての関わり方（子ども・保護者）についての理解を深める。
- 第11回 実地調査①—保育・幼児教育現場に赴き幼児理解を深める
保育所・幼稚園等（実地）に保育補助者として赴くとともに、これまで行ってきた実地での体験（教育実習、保育実習等）を踏まえ「幼児理解」に関する分析・検討を行う。
- 第12回 実地調査②—園環境・保育業務理解を深める
保育所・幼稚園等（実地）に保育補助者として赴くとともに、これまで行ってきた実地での体験（教育実習、保育実習等）を踏まえ「園環境・保育業務理解」に関する分析・検討を行う。
- 第13回 保育実践の事例分析を通じて保育の対象理解を深める—「幼児の理解」をテーマとして
ICT機器を積極的に活動しながら、専門職保育者の資質として実践上で重視されるテーマについて、これまでの学び（実地調査を含む）を振り返ると同時に討議等を通して幼児の捉え方やかかわり方（声の掛け方）について発展的・総括的に理解する。
- 第14回 保育の内容・方法を深める—「子どもと保育内容（表現）」をテーマとして
ICT機器を積極的に活用しながら、専門職保育者の資質として実践上で重視されるテーマについて、これまでの学びを振り返る（実地調査を含む）と同時に討議等を通して保育内容・方法について、保育内容表現を事例に発展的・総括的に理解する。
- 第15回 保育・幼児教育（子育て支援を含む）をめぐる今後の動向を踏まえながら4年間の学びを総括する
ICT機器を積極的に活用しながら、研究機関や行政・保育現場で取り組まれている現状や課題等を整理し、専門職保育者として保育・子育て支援にどのように向き合うかについて討議・検討する。また、保育・幼児教育を学修した4年間の振り返り、自己の成長・向上、将来への展望ならびに課題について教育学科のディプロマ・ポリシーに準え、検討する。

Ⅱ 2023（令和5）年度における指導上の特徴

本科目は、現行体制（2016（平成28）年度）になって以降、段階的に改善の手を加えてきた。これまでの継続的な取組に加え、今年度も授業運営計画立案の際には履修学生である幼児教育コースの4年次生が3年次に取り組んできた教育実習や保育実習等での評価・コメントを手がかりに、補完点と重視すべき方向性を確認した。また昨年度から引き続き、総括的課題を教育学科ディプロマ・ポリシーに準じた形で新たに作成した。

とりわけ、履修学生らは新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染拡大予防に伴う措置一様々

な大学行事の中止やオンライン（非対面）形式による授業、授業の代替措置—を在学時に経験した。

4年次の教育実習や幼稚園実習においても、子どもらとの関わりや職員としての業務に一定の制限がかけられていたという。そこで、実地（幼稚園・保育所等）理解に基づく実践力向上と、幼児教育コース教員と履修学生との間あるいは履修学生間のつながりを深める支援に取り組んだ。そのために、今年度もいくつかの学外機関・資源に協力を依頼した。具体的には、広島県教育委員会事務局学びの改革推進部乳幼児教育支援センター、実地調査協力園（幼稚園・保育所等）、すずらんひろば高陽、本学卒業生有志である。こうした学外機関・資源の理解と協力を受け、本科目が成立していることは何よりも特徴に他ならない。

そこで今年度は、「指導計画に基づく保育実践を深める③—全体討議とその後のグループでの再度の振り返り・討議」（第6回）、「幼児教育・保育学研究に関する最新の知見を理解する」（第3回）と「子育て支援（保育の対象理解としての保護者）の理解を深める」（第8回）についてとりわけ工夫を講じた。

概要は以下に示すとおりである。

1. 指導計画に基づく保育実践を深める③—全体討議とその後のグループでの再度の振り返り・討議

先述のとおり、履修学生は感染対策の措置により、日常生活のみならず学修上でも活動に制約を受けてきた。そこで、本科目では履修学生間あるいは教員と履修学生間の関わる機会を増やした。従来から当該の授業回は、履修学生を3－4名編成のグループに分け、保育実習Ⅱや保育実習Ⅲ、教育実習Ⅲで経験した子どもとの関わりや職員としての業務について話し合い活動により振り返り、その成果を全体討議として報告する内容であった。確かに、グループでの話し合いや全体討議は、これまでもにおいてもオンライン形式で可能であった。

だが、1年次以降さまざまな制約を受けて来た履修学生であるからこそ、学生間あるいは教員と活発に関わる機会を企てる必要が、当該学生らを対象としたこれまでの実習指導においてみられた。そこで、全体討議の運営の一部（資料編集や記録用機材の準備）を学生らに委ねることにした。従来、教員のみが行ってきたことを学生らに託すことにより、担当者間や担当者と教員との関わり（打ち合わせなど）、担当者とその他の学生との関わりが増えることを期待した。これまでの教育実習や保育実習においても役割を任される経験をしてきたからこそ、4年次後期に「任された役割を全うする」中で人との関わりを持つ経験は有意義であったとみなされる。

2. 教育実習・保育実習での実習園との連携強化に基づく学びの深化—「幼児教育・保育学研究に関する最新の知見を理解する」

当該の授業回は、学外の保育・幼児教育の研究団体主催の研修会への参加や、保育・幼児教育学研究者による講話会を催し、最新の研究に関する知見を得る機会と位置付けている。今年度は、広島文教大学教育学会に履修学生らは参加した。2022（令和4）年度から、保育実習や教育実習で実習する協力園での実践研究について学ぶ機会を積極的に設けることにしており、実習園・施設での実践研究に触れることによって、受講学生らは実習園・施設の実践理念などを深く理解することができ、また下学年生にとっては近い将来実習を行う可能性のある園での実践を事前に理解しておくことができる。また、実習園・施設側も実習以前に自園・施設を学生らに伝えることができると同時に、本学学生を実習前に理解することができる。このように、実習園・施設側も学生側も両者に利点が期待される。

今年度は広島文教大学附属幼稚園（科目「幼児の理解」、科目「幼児教育の体験活動」、教育実習Ⅱ実習協力園）の高嶋万友教諭（幼児教育コース2018（平成30）年度卒業生）に「常に学び続ける姿勢・子どもから学ぶこと」をテーマに講話を頂いた。卒業生かつ実習園教諭から園での実践について解説を受けることによって、実習園（様々な園）理解の促進につなげることができた。

3. 授業経験者が子育て・保育職を伝えることの意義—「子育て支援（保育の対象理解としての保護者）の理解を深める」

当該の授業は2016（平成28）年度から設定された。幼児教育コース卒業生をゲスト・スピーカーとして招聘し、自身の子育てや保育職に関するいくつかのテーマについて語る機会を設定している。受

講学生にとっては、近未来の自身の姿に近いモデルからの実体験に基づく講話は、例年好評である。

今年度の登壇者は、広島市立保育園勤務今坂桃子保育士（幼児教育コース2016（平成28）年度卒業生）であった。昨年度に引き続き、教職実践演習で卒業生から講話を受けた学生が、登壇する立場になった。

在学時の思い出、（卒後の）入職時の心境及び苦労とやりがい、結婚出産・子育てに勤しむ現況と改めての保育職に対する思い等、受講学生に寄り添った講話が繰り広げられた。履修学生らは、自分たちと同じ環境を過ごした卒業生だからこそ、講話に共感でき有意義であったと学修記録に記載していた。次年度以降も、授業経験者を登壇者として招いていく予定である。

Ⅲ 成果と授業改善に向けた課題

以上、2023（令和5）年度は、履修学生が多くの人たちと対面で関わる機会を増やすこと、そこには履修学生や教員はもとより、卒業生や実習協力園なども含まれる。まさに、地域で保育者（幼稚園教諭、保育士）養成を行う体制を更に確立させることができた。

次年度の授業改善に向けた課題として、教育実習、保育実習、幼児教育の体験活動、幼児の理解といった関連する演習科目・実習科目との指導内容・用語等の統一化をあげる。幼児期の教育を学び専門職者として成長していく学生らが、実習先等は異なるものの関連する事項を円滑に学ぶことができるよう指導上の共通化を本科目から各科目へ提案していきたい。

謝辞

本科目を実施するにあたり、多大なるご支援ご尽力を賜った広島県教育委員会事務局乳幼児教育支援センター田島美帆主査、同奥新恵理主査、幼児教育コース卒業生有志、実地調査受け入れ園・施設、常設オープンスペースすずらんひろば高陽関係各位に謹んでお礼申し上げます。